

郷土博 通信

No.5

2015 春



昭和初期の蔵書票(縮小率90%・解説10頁)



CONTENTS

■昭和初期の蔵書票	1	■郷土博物館のあゆみ(4)	7~9
■展示室紹介・関連記事	2~4	■蔵書票のこと	10
■江戸の天文学と久米栄左衛門通賢	5~6	■第5回公開講座お知らせ	10



第1展示室

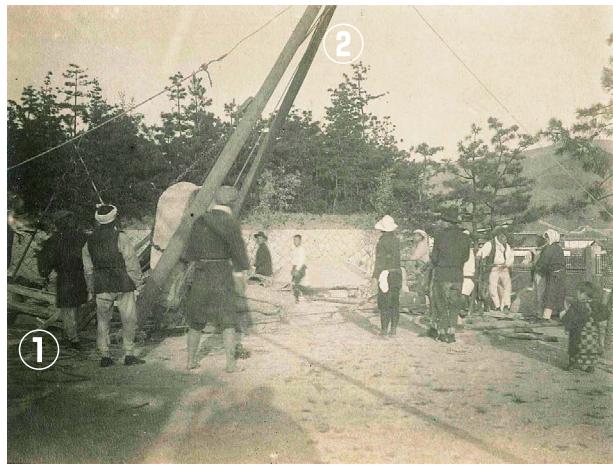


▲鎌田淡翁碑

第1展示室関係資料で館前庭に立つ鎌田淡翁(勝太郎)碑をご紹介します。石碑は花崗岩製、略測値で高3.4m、基部幅1.77m、同厚0.5mあり、石碑としては大きなものです。題額は西本願寺第23代門主勝如上人、撰文は文化勲章受章者で仏教学者高楠順次郎、書は藤原鶴来によります。碑文は漢字片仮名交じり文で刻まれており、撰文の原文であった漢文とは異なっています。いずれも楷書で題額は陽刻、碑文は陰刻されています。

碑文では鎌田勝太郎の生い立ち、長く貴族院議員を務めた政治活動、若い時から力を尽くした経済活動のこと、また図書館や博物館を開設するといった地域社会への貢献など彩り豊かで実り多い生涯を後世に伝えていますが、その精神的基盤が仏教への深い帰依であったことも述べられています。碑文の日付は七周忌の昭和23年3月28日で墓誌と同日ですが、実際には18年後、昭和41年4月に勝太郎銅像と共に建立されました。

濟済会記念碑建立風景（同記念碑については「郷土博通信No.4」参照）



▲石碑を建立位置に置く

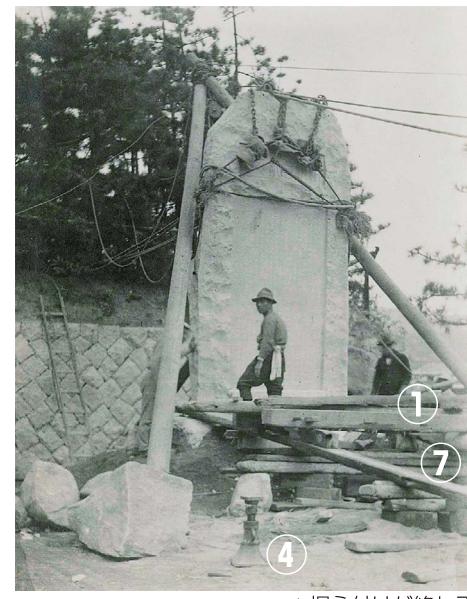
この3枚の写真は大正12年(1923)4月、牟礼村(現高松市牟礼町)の石工が濟済会記念碑を現博物館前庭に建てる様子を写したものです。

高さ4m近い石碑は様々な道具を人手で使いこなすことで建てられましたが、写真には使われた道具類が見えます。石碑の移動に必要なシュラ(①)、立ち上げるためのフタマタ(②)、碑に巻きつけたロープを巻き取るワインチ(③)、石を持ち上げるジャッキ(④)、また、木製(⑤)や鉄製(⑥)のボロッコ(滑車)、敷板のアイビ(歩板)(⑦)などです。これらはそのいずれもが石山での石の切りだしと搬出にも使われていました。写真から石碑をどのように建立したかその技術を確かに読み取ることはなかなか困難ですが、大正時代の石工用具の使用例を知ることができる貴重な資料です。

(廣瀬 永津子)



▲フタマタを使い立ち上げる



▲据え付けが終わる

第2展示室

御内御用測量下図と測量絵図帳に記された「干潟」

久米通賢がその生涯でなしとげた様々な仕事のうち後世に残した最大のものが、坂出浦の開墾であることは言をまちません。しかし関連資料が残ってはいるものの、具体的な土木工事の実態や事業の完成までの過程の解明はこれからだといえるでしょう。

ここで紹介する測量関係の資料は、坂出浦が塩田を造成する適地であることを久米通賢が認識し坂出開墾の着想を得た時期を知る材料のひとつではと思われるものです。

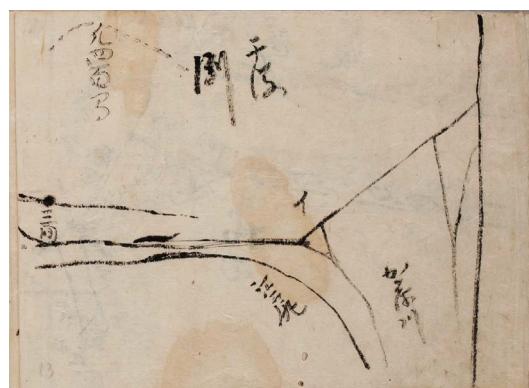
①の測量図は久米通賢が文化3年(1806)の高松藩領測量後に作成したもので、測量図を見ますと林田浦から江尻浦、坂出浦の沖にかけて一部途切れていますが、連続する破線を入れられています。測量時に使用された野帳である②で①の該当する部分を見ると同様な破線の横に「干潟済」、同下側に「凡四百間」の書き込みがされています。このことから破線は当時の海岸線から沖合まで伸びた干潟の端を表現していると考えられます。また、他の丁には注記はないものの半ば陸化していたのか島状の書き込みもあり、江尻浦から御供所浦の沖に遠浅の海が広がっていたと推測されます。絵図③は坂出塩田の計画段階で作成されたと思われるもので、朱線で塩田の造成計画を書入れ墨線で修正を加えています。この墨線は出来上りの塩田のおおまかな形を示しているもので、海に伸びた塩田北側の線が恐らくこの干潟の端辺りになるのではと読みとれます。高松藩家老であった木村亘(黙老)は隨筆『続聞くままの記』の久米通賢小伝の中で坂出塩田開発の6~7年以前より潮の干満を考えていたと記しています。しかし、これらの資料はそれよりもはるか前、文化3年高松藩領の測量途上坂出浦の広大な干潟をみた27歳の時点で、すでに開発の構想が芽生えていたことを推測させるのではないでしょうか。

(廣瀬 永津子)



▲①御内御用測量下図(西)(部分)

文化3年(1806)の高松藩領測量で作成された測量図の坂出浦の部分



▲②側量絵図帳 阿野北絵図并鵜多津新町川 内寅十二月十三日(部分)

測量地点の地形略図や測量値の一部を記入した野帳の加茂川(綾川)から江尻浦部分



▲③西御国境鵜足郡ヨリ阿野郡北林田村綾川据迄

海辺測量分間絵図・壱町曲尺三歩二縮タル図

(縦26.5×横67.0cm)(天地逆)

坂出塩田の計画段階で作成されたと思われる絵図



第3展示室

さまざまな摺絵展～錦絵、絵図・地図、挿絵からカレンダーまで～



▲百万塔陀羅尼

「陀羅尼」とはサンスクリットのダーラニの音訳。漢訳で総持または能持。仏教で用いる呪文の一種。梵文の呪文を訳さずそのまま唱えるもので、唱えれば災いを除き、利益を得るとされている。

ほんの少し前まで、日本人の暮らしの中には、木版や石版、銅版などで摺られたさまざまな絵が満ちていました。人びとは、錦絵や読本挿絵からはあこがれや愉しみを感じ、絵図・地図からは知識や情報を得ていました。また、信仰や礼拝のための仏画には心の安らぎを覚えること也有ったでしょう。

「摺る」という言葉には、版本などに墨や絵具、インクをつけ、紙などをあてて字や絵を写し取るという意味があり、この手作業により、同じものを大量に容易に制作することが可能でした。

今回の展示では、主に近世から近・現代にかけてこのような手順で摺られた絵を、「摺絵」としてご紹介します。機械で刷られたものとは違った風趣をお楽しみください。

ところで、奈良時代後期の神護景雲4年(770)に三重の小塔におさめて、法隆寺等の十大寺院に奉納された「陀羅尼」は、印刷年代が明確な世界最古の摺物(印刷物)とされています。この原版が銅版か木版かということについては、さまざまな研究や議論がなされてきましたが、今のところ木版という説が有力となっているようです。このことに象徴されるように古来、日本の摺物のほとんどは木版であったとされています。

古くは布教のための宗教版画に始まった摺絵は、やがて滑稽本や文学書、医学書などの挿絵や、精巧な多色摺の錦絵となり、さらに、従来の木版に新しく西洋から伝わった銅版や石版などが加わり、表現の幅が飛躍的に広がりました。

また、明治中頃には、印刷技術の発達により、手作業から機械刷りに移行し、産業としての需要は縮小しましたが、版画作家や画家によって芸術作品としての摺絵が創作されるようになりました。

(吉久 由紀子)



▲『北斎漫画』初編 葛飾北斎画

文政元年春再版(文政11年=1828)
葛飾北斎:宝暦10年(1760)～嘉永2年(1849)
江戸後期の浮世絵師で、洋画を含むさまざまな画法を学び、すぐれた描写力と大胆な構成を特徴とする独特的の様式を確立し、西洋の画家などにも大きな影響を与えた。また、読本挿絵・狂歌絵本などに腕をふるい素描家としてすぐれた力量を示した。『北斎漫画』は、葛飾北斎が給手本として発行したスケッチ画集。



▲矢嶋大合戦之図 月岡芳年画

月岡芳年:天保10年(1839)～明治25年(1892)
幕末から明治前期にかけての浮世絵師。初号は一魁齋芳年、玉桜楼のち大蘇芳年など。歴史絵、美人画、役者絵、風俗画、合戦絵など多種多様な浮世絵を手がけ、各分野において独特の画風を見せた絵師。



▲『草花百種』 幸野模嶽画

芸艶堂藏版 明治34年(1901)10月刊
幸野模嶽:弘化元年(1844)～明治28年(1895)
幕末から明治初期の四条派の画家。初め中島来章、のち塙川文麟に山水画を学び、京都府画学校教師となつた。また私塾を開いて後進の指導をするとともに、新日本画発展に尽力した。帝室技芸員。



江戸の天文学と久米栄左衛門通賢

第4回公開講座から

中村 士(大東文化大学東洋研究所・兼任研究員)

鎌田共済会郷土博物館に所蔵される久米通賢資料が、文化庁によって平成26年度の重要文化財に指定されたことは、過去に通賢資料を調査させて頂きました一人としてうれしいニュースでした。ほぼ15年前、私が鎌田共済会郷土博物館の通賢資料を調査するきっかけを作って下さったのは、大阪の堺鉄砲研究会代表の澤田平さんです。当時の私には通賢は未知の人物で、最初はあまり気乗りがしなかったのですが、澤田さんになかば無理やり誘われて調べるうちに、予期しなかった新事実がいくつも見つかり、徐々にのめりこんでいきました。この小稿では、天文暦学と測量の分野における久米通賢の業績を、江戸の天文学と共に簡単に紹介します。

江戸時代に、科学としての天文学を実践した最初の人は、我が国独自の暦を初めて提案し、幕府に「貞享暦」として採用された渋川春海はるみでした。その功績によって初代の天文方に任命され、江戸に住むようになります。隅田川の東、本所の地に幕府から賜った天文台では、渾天儀という装置を用いて熱心に天文観測も行ない、中国古来の星座に加えて61個もの星座を新たに設けました。その成果を、「天文成象」図という星図として出版しました。

貞享暦から約30年後、西洋天文学を導入して、伝統的な中国天文学を科学的な天文学へ脱皮させた人物が現われます。八代将軍の徳川吉宗です。紀州藩主から将軍になった吉宗は、書画・詩歌、芸能などにいそしんだ他の歴代将軍とは全く異なり、実用の学問と科学技術とに強い関心を示しました。特に吉宗は、最高権力者は天帝の意志を受けて政治を行なう、優れた暦を人民に授けるという、中国古代からの伝統的な政治思想、「觀象授時」を理想としていました。そのため吉宗は、西洋天文学に基づいた、より精密な暦の制作を目指して、自ら天文儀器を考案し、天文観測も行ないました。また、西洋の知識・学問を積極的に日本に取り入れるため、中国のヨーロッパ人宣教師が著した漢文の書物に対する「禁書令」の緩和を実行しました。この大英断が後に、科学技術における明治

近代化として開花することになります。吉宗の悲願だった西洋天文学による改暦は、当時の天文方の能力不足のために、吉宗の生前には実現しませんでしたが、やがて吉宗の遺志を継ぐ人が出てきます。大坂で医業を営みながら天文学の塾を開いていた麻田剛立ひろとうです。剛立の門からは、高橋至時、間重富ら優秀な弟子が輩出して西洋天文学を研究しました。中でも至時は、幕府の天文方に取り立てられて寛政の改暦を成功させました。「寛政暦」は、西洋の天文学の成果を初めて取り入れて作られた暦です。

さて、本稿の主人公である久米栄左衛門通賢(1780-1841)は、安永9年、高松藩領の大内郡馬宿村に誕生しました。18歳の時に(寛政10年)、同郷の伊藤弘と共に上に述べた大坂の間重富に入門します。働き盛りの若者を、実生活には縁の薄い天文学の塾などに留学させることが出来たほど、通賢の実家に経済的余裕があったのかどうか少し疑問ですが、ともかく重富のもとで4年間の修行をしました。寛政11年に重富は、幕府の測量御用掛として、淀川に沿って京都まで測量を行なっていますから、この時に恐らく通賢は重富に従って測量の基本と実際とを学んだものと思われます。

その後、父親が亡くなったため、久米家相続のために馬宿に戻りました。帰郷した同じ年に藩から召し出されているので、通賢が本格的に天文暦学・測量を学んだことを藩は察知していたのでしょうか。4年後の文化3年(1806)、藩命を受けて高松藩領の測量と地図作りに出発しました——伊能忠敬が讃岐地方の測量に来る2年前でした。忠敬や幕府天文方が用いた天文・測量器具とは異なる、独自に考案製作した「地平儀」と呼ぶ儀器を主に使用しました(図1)。私が「地平儀」を調査した時に、当時の日本ではほとんど理解されていなかった、バーニア副尺という最先端の目盛が組み込まれていたのを見つけて驚いた記憶があります。また、通賢の讃岐測量記録である「測量方位記」を詳しく検討した結果、方位角に関しては、2年後に来訪した伊能忠敬の測量を上回る精度の測定が行



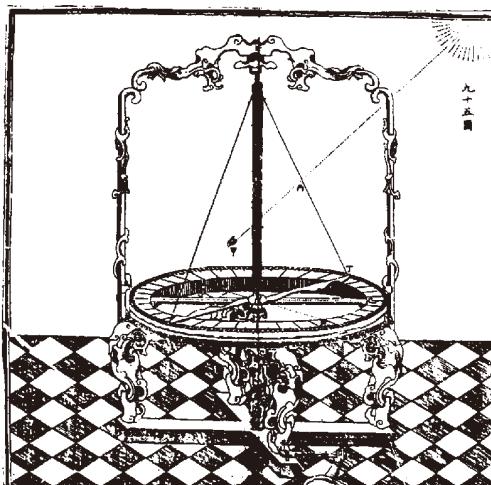
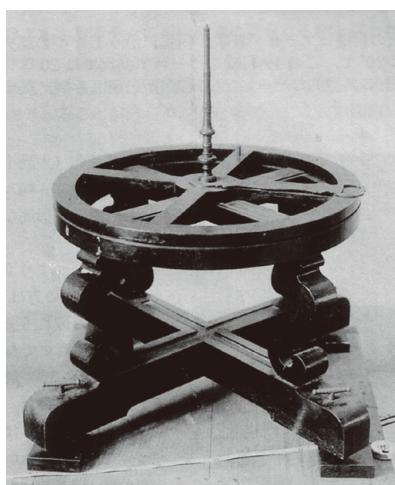
なわれていたことを知り、感銘を受けた次第です。

この測量によって制作されたはずの高松藩地図は、戦災で失われたためか、従来はその存在が知られていませんでした。ところが2002年になって、通賢の署名が記された大きな高松藩領の「御内御用測量下図」が偶然発見されました。関係者と共に初めて見た巨大な二枚の地図の印象は、今でも鮮明に頭に残っています。この文化3年の讃岐測量行が契機になって、やがて通賢は坂出地方の塩田開発を藩に上申して認められ、それがずっと後世に至って、香川県が日本屈指の製塩の県に発展したことは、良く知られている通りです。

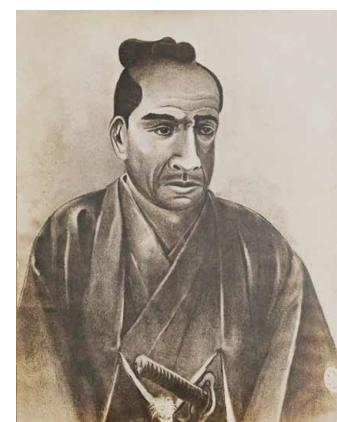
通賢は30歳代前半では、彗星、日食などの天文観測を熱心に行なって間家に報告したことは、鎌田共済会郷土博物館のほかに、大阪歴史博物館にも通賢の報告書が残っていることから分ります。間家の文書には、通賢が天文観測用の時計である垂搖球儀も製作したと記されていますが、これは通賢が残した観測野帳の日食観測データの数値から裏付けられます。しかし、20代の終わり頃から、北辺の守り・国防に強い関心が向くようになりました。文化3年(1806)、ロシア勢力が樺太や^{えとろあ}押捉に侵入したことに通賢は危機感を抱きます。中国書の「武備志」などを参考に、文化4年には軍船と操船、兵器、蝦夷気候論をまとめた「戦船作積覚」を執筆しました。さらに、海外勢力の武力に対抗するためでしょう、鉄砲、大砲などの武器開発に精力を注ぐようになりました。太平洋に面しない

内海の讃岐の地に住みながら、このような危機意識を育んだことは、通賢が若い頃から国際情勢にも敏感な精神の持主だったことを物語っているように私は思います。鋼輪式短銃、百敵砲、鎗間銃、気砲(空気銃)、神雷砲、馬上筒など、各種新型銃器を開発する努力は終生続けられました。晩年に通賢が書いた「大成賡銘」の中に、老眼のために鉄砲加工の細かい手作業が出来なくなったと嘆いている記述が見えますが、私も同じ老年の身として、通賢の悲しみはよく理解できる気がします。さらに通賢は、高松藩の領内だけで活躍したのではありません。愛媛県の別子銅山の水抜き工事、遠くは遠州(浜松あたり)の新居湊の開発等にも出掛けています。しかもそれらを、ほとんど独力で成し遂げたのでした。

上に述べた数々の優れた通賢の業績に共通する特徴は、他人の模倣を潔しとしない、高い独創性と絶えざる改良の精神と言ってよいでしょう。ただし、私が少し残念と思うのは、これだけ優れた多くの業績にもかかわらず、知られる限り、弟子もなく後継者も生まれなかつたことです。それは、残っている通賢の肖像画からもある程度想像はできますが、孤高で人と容易になじまない彼の性格が一つの原因だったのかも知れません。しかし、いずれにしても、江戸時代に誇れる通賢の事蹟を忘れないために、私たちも彼の業績を顕彰する努力を、今後少しずつでも続けていく必要があると私は感じています。



▲(図1)(左)、久米通賢が製作した「地平儀」。(右)、中国の科学技術書、『靈台儀象志』に載っている「地平經儀」の図。恐らく通賢は間重富の所でこの中国書を見て、後にこれを参考に「地平儀」を作ったものと思われる。



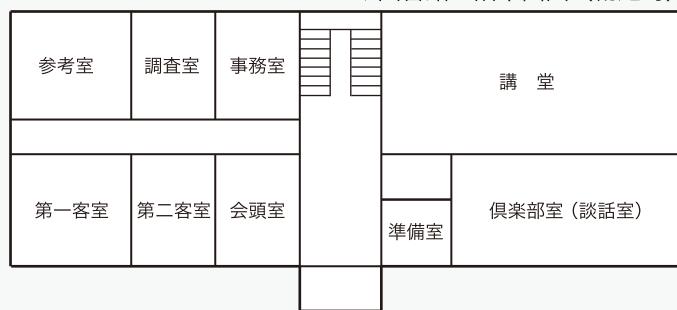
▲久米通賢肖像画



郷土博物館のあゆみ

(4) 「調査室」「参考室」とは何か

▼図書館2階平面図（創建時）



「調査室」「参考室」の設置

前号で取り上げた調査部は、旧図書館（現郷土博物館）2階にあった調査室と参考室を拠点としており、大正14年（1925）5月に図書館の西南に郷土博物館が開館するとその活動をも担う重要な室となる。そこで今回はこの両室の成り立ちや設置目的のほか、参考室の変遷について述べることにしたい。

図書館建設時の資料によると、調査室と参考室は大正11年10月の調査部設置以前から存在していた。すなわち前年の大正10年9月に建設が始まる図書館の計画に含まれており、図書館竣工時には完成していた。前号で述べたように調査部は岡田唯吉の鎌田共済会赴任に伴い急遽設けられたもので、図書館建設の時点では予定されていなかったとみられる。そうするとこの2室を設けた当初の意図は何であったかが問題となる。

図書館の建設は大正10年4月から本格的に動き出しが、初期の案は2階を共済会本部という位置づけにしており、それに伴う部屋の設置を検討した形跡がうかがえる。その中に研究的部署の構想もあったようで、「研究室」という名称が見えるが、それはやがて「調査室」に変る。次いで参考室も加えられ、最終的に上図のような配置で部屋が設けられることになった。

建設時の資料には調査室や参考室の用途を記したもののが残っておらず、この2室が何を目的として設けられたか明かでない。そこで比較的詳しい記録が残されている大正12年以後の使用状況や鎌田共済会施設全体の動きを見てゆくとともに、会頭鎌田勝太郎の意向なども推し量り、それらを踏まえて2室設置の理由を考えてみることにする。

両室の機能および久米通賢資料

調査室の面積は16.5m²、参考室は20.7m²で、それほど広いとはいえないことから、多くの人員での用務は前提にされていなかったと思われる。

大正12年の調査部記録によると、調査室には書棚、戸棚、掛物台（軸物収納具か）等があり、拓本用器、写真機、謄写版等の器具類、消耗品として草稿用紙、淨書用紙（原稿紙、模写用紙）、カード、図画用紙、拓本用紙、謄写用紙、筆墨などがあった。また地図類、新聞切抜、写真帖、参考書、参考雑誌も用意されていた。嘱託の筆工（耕）もいた。職員は当初は岡田唯吉1人であった。

調査部の主要な業務は郷土の歴史・地理に関する調査研究と「史料」の収集、謄写、模写であり、上記の備品等はその目的に沿ったものであることが分かる。

一方、参考室の方は陳列箱、戸棚があり、収集品、地理歴史参考品等を陳列しており、額装や軸装もある実物資料の展示室であった。当初は図書閲覧者の読書の参考になるものの展示という位置づけでもあり、休養、気分転換の場にもなるとしている。しかもこの室が「御覽記念参考館」ともされ、そこには「御覽史料」を展示していたとあることが注目される。

「御覽史料」とは言うまでもなく大正11年の裕仁皇太子（後の昭和天皇）、大正12年の久邇宮家一行（皇太子妃となる良子女王同行）が「御覽」になった資料を示す。その中核をなすのは久米通賢資料であり、大正11年11月20日には2階講堂で皇太子の観覧が終わると、続いて一般にも公開した後の12月3日に、「久米翁遺品」を講堂から参考室に移し陳列している。

このように久米通賢資料が通常は参考室に展示さ



れていたことが分かる。これらは鎌田勝太郎が明治期から所有していた器物を中心とする資料であろう。この後さらに参考室には別の久米通賢資料が収納されることになる。

岡田唯吉が大正12年3月6~8日に大川郡相生村馬宿(現東かがわ市)の久米通賢旧宅調査を行い、その記録を大正13年3月20日付けで作成している。その中で、旧宅倉庫内に多数の通賢資料が残されていたことを記すとともに、通賢の曾孫久米栄^{くめ さかえ}が同家に蔵されていた「多数有力ナル手記文書製作物等」を「特志」をもって「坂出鎌田図書館参考室」に寄託したと記している。参考室には先の御覧史料に加えてさらに久米栄所蔵の久米通賢資料も入ったのである。

寄託のことは大正13年9月刊の『鎌田共済会雑誌』第1号にも掲載されており、そこでは、「久米氏現戸主たる久米栄氏の厚意」により同氏所蔵の全部の参考史料を鎌田共済会調査部に寄託されたので久米通賢の事蹟を確実かつ詳細に研究調査できるようになつたと記している。

大正12年12月に共済会理事長鎌田憲夫と久米栄との間で通賢資料の寄託契約がなされているが、全部で22件であり、久米家蔵の全てとは思ないので、寄託の一部かとみられる。この契約を含む久米通賢資料に関する寄託・貸借証等の写しを綴じた「久米通賢遺品預り目録」の表紙に「参考室備付」と記されている。これは参考室に久米家伝来分も含め久米通賢資料が収納されたので、その根拠に関わる書類として備え付けられたことを示すものであろう。

しかし、その後、郷土博物館が開館すると、これら久米通賢資料は参考室から博物館に移され、その展示物の中核となる。

郷土博物館の展示については次号以降で述べるが、たとえば開館準備中の大正14年2月の展示案では、「1.久米栄左衛門遺品部」があり、以下2.歴史部、3.美術部、4.美術工芸部等がある。以後博物館2階の一郭には常に久米通賢資料が展示されることになる。

博物館開館後の「参考室」と「第二参考室」の開設

図書館2階の参考室はその後も用途を変えながら使用され続けるが、当初の読書の参考資料展示の場所から、しだいに特別展示室の様相を帯びてくる。

昭和4年(1929)の調査部・博物館事業計画では図書館2階を郷土研究室にする案が提示される。それは参考室と事務室の2室を使用し、参考室には讃岐史研究参考品、事務室には讃岐史研究参考書を備え付け、その他に廊下、講堂、談話室、3階展望室の壁面に額等で文書、写真、書画を掛けるというものであった。これ以降、参考室は讃岐史研究の場に特化していく。

同年10月には参考室を「特別参考室」とし、讃岐史料を陳列して来賓及び特別研究者の観覧に供している。

昭和6年6月には参考室を「坂出記念室」としており、昭和10年3月には参考室を「郷土資料室」とも呼んでいるのは、坂出史を含む郷土研究の場であり、讃岐史料も変わらず展示していただろう。

一方、昭和5年度事業計画では参考室の拡大策が出され、3階の展望室か2階講堂を第二参考室とする案が示されるが、それはやがて講堂の利用にしばられてゆく。

講堂を第二参考室に転換する案の背景になっているのは、共済会の施設として昭和2年5月に郷土博物館の西方に社会教育館が開館したことがある。同館はその後さらに増築し、昭和8年には大小4講堂や各種の部屋を備えた施設となる。従来、図書館2階の講堂は講演会や図書館主催の展覧会等に用いられてきたが、外部からの使用希望もあり需要が増えたことと、社会教育を強化するという共済会の方針もあり、社会教育館が新設された。その結果、図書館講堂の転用案が出たのである。しかし実際に転用されるまでにはなおしばらく時間を要した。

大正11年11月20日に裕仁皇太子が訪れ、講堂で久米通賢資料等を観覧したことを記念して、翌年11月19、20日にこの講堂で皇太子行啓記念史料展覧会が開かれた。まだ郷土博物館建設以前ことで、図書館主催であった。これ以後、行啓記念展は毎年11月に行われ、郷土博物館が出来ても講堂は使い続けられた。皇太子、さらにはその妃となる良子女王ゆかりの場所である講堂で行うことには意味があったからである。

その10回目は昭和7年で、「満蒙事情と坂出町勢資料」を内容とする大がかりな展示であった。当時の満州国建国をめぐる時局を反映したもので、講堂を始め図書館の階上・階下の多くの室を使って行われた。展



示は例年の如く11月19～21日で終了したが、講堂は「満蒙資料研究室」として「坂出館」(2階の参考室)とともに存続させ、翌8年にも展示を続行した。その当時、郷土博物館が改築のため翌8年2月から長期休館になるという事情もあったためだろう。

昭和10年(1935)8月16日には皇弟澄宮(後の三笠宮)が来訪し、崇徳天皇関係金石文と久米通賢資料を展示した特別陳列室(講堂)と博物館等を參観した。澄宮の来訪は共済会創立以来皇族として3度目であり、この光栄を永く記念するためとして同年12月1日に社会教育館で「迎光記念式」なる式典を行った。

昭和12年6月5日には朝香宮鳩彦王(久邇宮邦彦王の実弟)が来訪し、調査部参考室、久米通賢資料特別陳列室(講堂)や博物館等を順覧した。このようにして講堂の特別展示室化が進行して第二参考室へと転換する。

昭和17年10月刊『財団法人鎌田共済会要覧』には昭和16年10月現在の状況として、調査部の設備は、

第一参考室 讃岐史籍史料、絵画類、拓本

第二参考室 遺墨遺品類、写真、

久米栄左衛門遺品

調査室

を挙げており、元講堂の第二参考室は調査部の管轄となり、久米通賢資料が博物館から移されて常時展示されるようになったのである。もちろん全てが移されたわけではなく、博物館に展示されるものも当然あった。

鎌田勝太郎と久米通賢資料

久米通賢資料は図書館が出来ると参考室に、博物館が出来ると博物館に展示された。ただし皇族の参観の際は講堂が使い続けられた。それでは図書館が出来る以前の久米通賢資料(勝太郎所持または管理のもの)はどのような状況にあったのであろうか。

大正2年11月7日に政界の重鎮大隈重信一行が鎌田邸を訪問するが、勝太郎は顧問をしていた坂出塩産合資会社から取り寄せた「久米通賢翁遺品」を観覧に供した。それを大隈は鎌田邸の香風園で実見している。

大正6年5月3日には徳川宗家16代当主徳川家達・夫人、尾張・紀伊・水戸家当主・夫人、高松松平家当主・夫人等賓客14人が鎌田邸を訪問したが、その際

にも香風園で「久米翁遺物」を観覧している。

鎌田共済会図書館の開館式は大正11年9月23日に行われたが、その際にも「久米翁遺物」を招待者の一覧に供している。

そして前記のように、裕仁皇太子、久邇宮家の図書館講堂での観覧に続くのである。

断片的に知られる事柄ではあるが、こうしてみると勝太郎はやはりしかるべき賓客・要人に対して機会あるごとに久米通賢資料を一見に入れようとしていたと判断される。

これらが勝太郎所蔵のものか、他の所蔵にかかる物も含むのか判然としない場合もあるが、勝太郎が坂出発展の礎を築いた久米通賢に関わる資料を極めて重視するとともに、通賢を顕彰する、広く認知させるという強い意志があったことを示すものと思われる。

そこで、冒頭に述べた図書館に調査室と参考室を設置した目的は何かの問題にもどるが、答えは自ずと明らかで、やはり勝太郎は恒常に久米通賢資料を保管・展示する場所が必要と考えて参考室を設けたのであろう。ただし、単に自己の所有する資料だけでなく、それ以外の久米通賢資料もできるだけきちんと保存しておきたいという思いがあり、それが久米家資料の寄託につながったのではなかろうか。

調査室は、狭く考えれば参考室の久米資料を調査し、さらに探索することを任務とする部署であった可能性もあるが、広く郷土史研究も視野に入っていたのではなかろうか。共済会に岡田唯吉を招いたことは、郷土史研究という前提があったと思われるからである。しかし岡田は単なる研究だけでなく、その強い史料重視の方針で、史料収集・集積の性格を持った部署にしていったのである。

このようにして図書館建設により、勝太郎の目的は一応達せられたと思われる。しかしその後に「御成婚記念館」(郷土博物館)を建てるこになり、久米通賢資料展示場所の変遷となつたのである。

(学芸・あゆみ班)



蔵書票のこと

(表紙解説)

蔵書票は書票ともいい、本の見返し部分に貼って、その本の所蔵者を示すための小さな紙片のこと。国際的には、エクスリブリス(EX LIBRIS)というラテン語の「(だれそれの)蔵書から」という意味の言葉が広く使われている。

蔵書票の起源は古く、15世紀にドイツで始まったとされており、書物が貴重で高価であった時代にその管理のために発生し、発展したと考えられている。現存する最古級の蔵書票は、ドイツで1450年から70年頃に作られたとされるハリネズミの図柄のもので、図中のリボンには、「もしもこの書物を返さなければハリネズミがあなたにキスをする」と書かれている。



▲『書物愛 蔵書票の世界』より

古来、本の持ち主を示すものとして蔵書印が主に用いられていた日本に、蔵書票が持ち込まれたのは、明治33年(1900)のこと。木版画の技術を学ぶために来日したオーストリアの版画家エミール・オルリックが、文芸誌『明星』で紹介したのが始まりとされている。その後、大正11年(1922)には日本蔵票会が設立されるなど、作家や蒐集家などの愛好者は次第に増え、「紙の宝石」と称される程、デザインも技法も多様化し、洗練された美しいものが作られるようになった。

ところで、表紙の蔵書票は、昭和16年(1941)から19年(1944)にかけて、仲多度郡竜川村(現善通寺市原田町)の日本蔵書票研究所 北村 勝氏より当館に寄贈されたもので、板 祐生、荒井とみ三、加曾利鼎造等が制作した蔵書票が45枚と、当館の岡田唯吉に宛てた手紙3通が寄贈順に台紙に貼られて綴られていた。昭和19年5月の手紙からは、鎌田共済会でも博物館や調査部の蔵書票を作ろうとしたことが窺えるものの、残念なことに実現には至らなかったようである。

(吉久 由紀子)

板 祐生(いた ゆうせい)作 ①②③⑤⑦
明治22年(1889)～昭和31年(1956)

孔版画家、郷土玩具、民具、ポスター等の収集家。鳥取県西伯郡東長田村(現南部町)で生まれた。本名は板愈良(いたまさよし)。生涯の大半を山村の分校の教師として過ごす傍ら、ガリ版(謄写版)印刷によって、郷土玩具をモチーフとした暦や本、蔵書票等数多くの孔版画を制作した。暖かさと優しさを感じさせる作品は高い評価を受けた。

荒井 とみ三(あらい とみぞう)作 ⑥
明治35年(1902)～昭和46年(1971)

漫画家、郷土史家。高松市北浜町で生まれた。名は富三郎、号をとみ三。昭和の初め、家業の傍ら絵が好きで、宮尾しげをに師事。絵と文で高松の史跡、伝説などを地元の新聞に数多く発表した。また、郷土の民話、伝説・風俗などに関した多くの著書がある。

加曾利 鼎造(かそり ていぞう)作 ④
明治33年(1900)～昭和27年(1952)

切手図案家。東京で生まれた。大正12年(1923)東京美術学校工芸图案科を卒業し、中学校で教鞭をとった後、大正14年通信博物館図案部員として切手の図案作成に携わる。

INFORMATION

■ 鎌田共済会郷土博物館第5回公開講座

「鎌田共済会の出版活動と刊行物あれこれ」

平成27年4月25日(土) 13:30～15:00(開場13:00)

● 参加無料、締切4月18日、先着40名

会場: 鎌田共済会郷土博物館2階講堂

講師: 加藤 優(館長)

電話・FAXかHPのフォームからお申込み下さい。

電話: 0877-46-2275

FAX: 0877-45-0035

HP: <http://www.kamahaku.jp/>



■ 張り子の虎絵付け体験講座(予定)

平成27年8月1日(土) 13:30～15:30

講師: 田井 鮎子(香川県伝統工芸士)

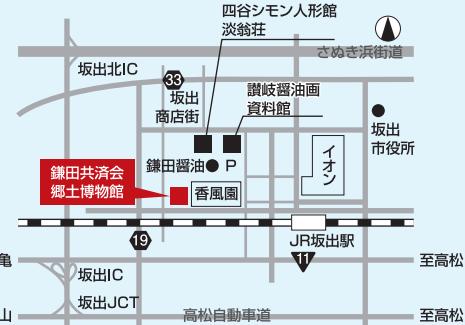
■ 第6回公開講座 次回予告(予定)

平成27年10月24日(土)

近代天文学のはじまりと大阪(仮題)

講師: 嘉数 次人(大阪市立科学館)

鎌田共済会郷土博物館



Access

高松から…快速マリンライナーで約15分

岡山から…快速マリンライナーで約40分

JR予讃線坂出駅から徒歩5分

※駐車場あり

開館時間: 午前9時30分～午後4時30分 (入館は4時まで)

休館日: 月曜日／祝祭日

夏季特別 (8月13日～15日)

年末年始 (12月29日～1月4日)

入館料: 無料

郷土博通信 No.5 2015春



- ① 7.7×6.5cm
- ② 6.3×5.0cm
- ③ 7.8×5.3cm
- ④ 9.5×6.5cm
- ⑤ 8.8×5.3cm
- ⑥ 8.2×5.4cm
- ⑦ 6.2×6.7cm